

○横浜薬科大学 モバイルファーマシー説明会の様子と生徒の感想



モバイルファーマシー車内を見学させていただきました。

(左) 横浜薬科大学のモバイルファーマシー 2

(右上) 車内の薬品棚

☆生徒から横浜薬科大学の方へのお礼と感想

1年 K.Rさん

今回は、佐竹准教授と鈴木准教授のお話を聞きました。

まず、モバイルファーマシーの誕生のきっかけについて伺いました。東日本大震災時に、宮城県薬剤師会が初めて、迅速な医療ができる環境を整えようと発足させたそうで、現地の医療従事者の方々の熱意に驚きました。モバイルファーマシーの車内には、大量の医薬品を保管できる薬品棚が設置され、他にも充電機能や包装用の機械も装備しています。驚くことに注射器や点滴の製作も可能であり、大変充実した機能を備えていました。

災害時のモバイルファーマシーの仕事は多岐にわたります。医薬品の供給と管理、患者が常用する薬の割り出しや、適切な形での医薬品提供などです。さらに、乗車している薬剤師は材料の不足等の状況に応じて医師と連携し、医師が作成した処方箋に基づいた薬をファーマシー内で作成したり、処方箋の内容変更や薬に関する情報提供、避難所に関わる支援をしたりしているそうです。

次に、災害医療時の薬剤師の関わりについて、お話を伺いました。

横浜市は地震大国日本の中でも、海洋プレートが地中へと引きずり込まれる時の歪みが引き起こす海溝型地震の可能性が高い地域なので、今一度対策について深く考える必要があると感じました。近年では、世界全体においても自然災害は上昇傾向にあり、降水強度の増加による豪雨の頻発化や激しい気候変動など、世界規模で災害発生頻度の深刻化している事を改めて感じました。

最後に、薬の正しい使い方のお話を聞きました。私たちは風邪をひいた時すぐに風邪薬を飲みますが、飲まなくても治る場合もあるそうです。だから、あまり薬に頼りすぎない生活を送るように心掛け、どうしても服用する時は、コップいっぱいの水またはぬるま湯で飲むなど、用法用量をしっかり守ろうと思います。

1年 T.Mさん

病気治療の為、普段から通院することが多い私にとって、薬剤師は身近な存在です。今回のお話にも、災害時は毎日飲まなくてはならない薬が手に入らなかったり、大雨や火事などで常備薬をなくしたりすることがあると聞きました。そうなったら、二次被害を招くことになり危険なことだと改めて気づきました。

モバイルファーマシーのように、緊急時にも医療が受けられる体制があることは、安心して生活する上で有意義なことだと思います。しかし、いくら体制が整っていても自分が災害に備えて準備をしていなければ、想定外の被害者が押しかけることになり、誰にとっても最善の治療ができないと感じました。

先生方がお話しくださったように、まずは「お薬手帳」をいつでも持ち歩くなど、小さなことから工夫して始めようと思います。